

## 第2次大戦の日本の行動 (その6)

### 苦闘を続けた後退期

01602334 松山大学 湊 晋平 Minato Shimpei

#### まえがき

1942年夏から1944年初夏にかけての22カ月の長期に渡って、ソロモン諸島とパプア・ニューギニア、中部太平洋のクリゼリン、マーシャル群島で壮絶を極めた戦闘が行われた。

これは米国が戦前オレンジ計画として作成した「赤道北での水陸両面作戦」という予測に相当するものであった。オレンジ作戦では戦闘の舞台を「主要戦域は赤道から北緯35度のハワイ～アジア間の海域、他の海域は小規模な戦闘および輸送路に当てられる」と想定していた。しかし現実には南半球にかけてその2倍の領域に達していた。戦闘の舞台こそ予想を外れたが、結果は予想通りであった。日本軍は米軍の進攻を叩き、その進出を遅らせようと努力したものの西方への進出を停止させることは出来なかった。

この報告では日本軍が善戦したギルバート諸島のタラワ・マキンの戦闘を中心に検討する。

#### タラワの戦闘

山本GF長官の戦死後、GF長官となった古賀峯一は“日本が米軍に勝利を得る見込みは1/3に低下した。GFは戦力が均衡している間に積極的決戦を求めると語った。なかまか決戦の機会に恵まれず戦力を消耗している間に1943年11月Op.Galvanic電流作戦で米軍はタラワに上陸した。

タラワは真珠湾南西4000km、日本のトラック基地の南東2000kmにあり、北方；マーシャル諸島、西方；カロリン諸島、南方と東方にはハワイ、南太平洋、ニューゼーランド、豪州にいたる連合軍の基地が連なっていた。

オレンジ計画、遊撃作戦でも日米の決戦が行われる海面と予定されていたが、戦力を消耗したGFは救援も出来ず玉碎の経過を見守る道しかなかった。

11月20日2隻の戦艦の艦砲射撃により圧倒的に有利な米海兵隊が上陸してきたが、寡兵の日本軍はよく敢闘し多大の犠牲を払いつつながら11月23日、最後の「万歳」突撃を敢行した。

中部太平洋の名も知れぬ小さな島で、米軍の犠牲が

3400人にもなったことに、全米は衝撃を受け世論は沸騰した。

しかしながら米軍はこの戦闘を通じて多くのことを学んだ。艦砲射撃の改善、空母機による対地支援、戦車・歩兵・工兵の統合訓練、無線通信手段の改善等、空艦協同、戦闘部隊の有機なコミュニケーション手段とチームワーク構築が図られた。この成果は次のマジロ、グリゼリン島攻略(1944.1～2)において圧倒的な犠牲の減少として表れた。

米軍はギルバート諸島およびマーシャル諸島の攻略を2ヵ月少々で完了した。日本軍はこの諸島を6ヵ月保持したいと考えていた。このように西太平洋への島唄い作戦の基地が確保されていた。

#### まとめ

第2次大戦の第2期、太平洋戦線で幸運とチャンスを生かして辛うじて勝利を得た米軍は、続く第3期その巨大な工業生産力により次第に航空戦力・海上戦力に優勢を構築し、強力に西進した。

激しい局地戦を経て日本軍支配下の中部太平洋の島々を攻略し、空・海の前進基地を建設し、補給を確保する。日本軍は損失を覚悟し、海軍の航空部隊を繰り出して防戦抵抗し、米軍に時間の浪費と艦隊の損耗を与えつつ後退していくが、米軍は次第に消耗戦に勝利を収めていく。

パプア・ニューギニアやインドのインパールでは補給を絶たれた陸軍が苦闘しつつ自滅していく。

また米潜水艦による海上補給路の遮断は、次第に日本の戦争能力を失わしめた。こうして日本は劣勢下で海軍航空戦力の再建もできず、望まざる時期にマリアナ諸島近海で絶望的な決戦を強いられる。

#### 参 考 文 献

- 1) 野中郁次郎、「アメリカ海兵隊」, 中公新書, (1995)
- 2) C.W.ニミッツ, E.B.ポッター著; 実松義 富永謙吾訳, 「ニミッツの太平洋海戦史」, 恒文社, (1962)
- 3) ヘンリー・シヨー著; 中野五郎監修, 「タラワ—米海兵隊と恐怖の島」, サンケイ出版, (1970)

